

群 教 セ	G01 - 05
	平14.205集

# 読書へのアニメーションを活用した 読書指導の事例分析的研究 — 本好きな生徒が育つために —

長期研修員 生方 嘉彦

## I 主題設定の理由

本を読むことは楽しいものである。自分が気に入った本に巡り会えた時には、時間がたつのも忘れ、読むことに夢中になる。いつの間にか、本の世界の中に入り込み、登場人物の行動に時には痛快な思いをし、時には悲しい出来事に胸を痛める。自分自身の生き方や社会について考えさせられることもある。読むことで自分の考えは更に深められ、心に潤いや活力が与えられていく。本好きな人は、読むことがもたらすこれらの恩恵を知っていて、読書を自分の生活の一部として、言語生活を充実させている。是非、生徒たちには、本を読む楽しさを体験し、本好きになってほしい。そして、互いに本について語り合い、自分の生き方を深めることができるようになってほしいと願っている。

残念ながら、小学校の低学年のころは、絵本の読み聞かせなどで本の楽しさを味わっていた子供たちが、次第に読書と離れ、中学校段階で本好きと言える生徒は、ごくわずかになってしまっている。本好きな生徒は、自分で読みたい本をイメージしながら本を選ぶこと自体を楽しんだり、自分のお気に入りの作家や作品のジャンルを持っていたりするなど、本の世界を味わう術を知っている。しかし、大半の中学生は、自分にあった本を選ぶことができず、本をじっくり読み深めていく楽しさも体験できずにいる。読書の時間を設けても、本を取り替えてばかりいたり、途中で読むことをやめて友達のおしゃべりの時間になってしまったりとなかなか読書へと気持ちが向かわない現状がある。

生徒が読書離れを起こしている原因として、まずどんな本を読むかという指導が十分に行われてこなかったことが考えられる。何を讀んだらよいか分からないという現状があるのに、周

囲は、名作と呼ばれる明治・大正期の文豪の作品を、中学生にふさわしいものとして紹介する。本当に興味や関心を持つものは何なのだろうかという検討を十分になさないまま、勉強になるからとか、中学生くらいならこれくらい読めるだろうといった理由だけで本を勧める傾向があったと考えられる。次に、これまでの国語科指導において常に同じようなパターンで読解指導が進められてきたことが挙げられる。どの作品でも、同じような指導計画、同じような読解方法で作品を理解しようとするので、生徒にとって本を読むことは新鮮みに欠ける魅力のないものになっていた。更に、授業や課題として感想を安易に書かせることも読書離れの生徒をつくる原因となっていたのではないかと考える。

これまでも、様々な読書指導の実践が行われ効果をそれぞれ上げてきた。しかし、依然本を読まない生徒が多い現状を考えると、本を読む過程において本好きな生徒が育つ要因がどのような場面で生じているのかを、分析・考察して明らかにしていくことが必要と考える。そして、導き出された要因をもとに、中学生の読書指導をどのように行っていくべきかその方向性を探っていくことが重要なのではないかと考える。

そこで、本研究では、あらかじめ仮説を持たずに実践を行い、得られた観察結果などを中心に事例分析・考察を行っていく事例分析的手法を用いることで、本好きな生徒が育つ要因を明らかにし、中学生の読書指導がどのように行われるべきか提唱していきたいと考える。実践資料を収集するために取り上げていくのは、読書へのアニメーションという読書活動である。取り上げた理由は、読書へのアニメーションが新しい読書活動で、生徒に新鮮な印象を与え、意欲面の分析・考察を行うための事例を収集するのに適した読書指導法と考えたからである。

## Ⅱ 研究のねらい

本好きな生徒が育つ要因を、読書へのアニメーションの実践によって、実践事例を収集し、分析・解釈することで明らかにする。

## Ⅲ 研究の内容と方法

### 1 研究の内容

(1) どこに着眼して分析を進めていくか

生徒と本とのかかわりは、本と出会うことから始まり、読み終わるまで様々な段階がある。本研究では、生徒と本のかかわりを大きく、次の三段階に想定して実践事例の分析を行う。

#### ① 本と出会う段階

#### ② 自分で作品世界をとらえる段階

生徒一人一人が、作品世界をとらえ、本とのかかわりを深めていく段階

#### ③ 本を介して他者と交流する段階

他者との読みの交流を基にして、自らの読みを更に深めていく段階

②と③の段階は、相互に作用し合いながら読書の過程を形成していると想定している。これらの段階ごとに、本好きな生徒が育つための要因を分析する着眼点を設定して収集して、事例を分析・考察していく。

(2) 読書へのアニメーションについて

本研究では、読書指導の事例を収集するために、読書へのアニメーションという読書活動を取り上げ、その活用を通して、本好きな生徒が育つ要因を探る。本活動は、生徒一人一人の読む力を引き出すことを目標としている。指導者は、生徒の実態に合わせて読みの力を引き出すために系統的に考えられた手だて(作戦)を選択し、生徒が共通して読む本(作品)を選択する。共通課題となる本を事前に各自が読んでおくことが前提とされる(実態などを考慮して、当日読む形態をとる場合もある)。活動は、遊びの要素を取り入れた作戦に従って行われる。指導者は、生徒の実態に合わせて、適切な本を選択し手だてを選択する。活動中は、主体的な生徒の活動を重視した援助を行うことが指導者に求められている。

(3) 「ぐんまの子供にすすめたい本 200 選」を活用した本の選択

本県では、「本との出会い200プランーぐんま読書活動推進事業ー」として読書を県内の小・中学生に積極的に勧めている。そのための方策として、「ぐんまの子供にすすめたい本200選」(以下「200選」とする)が選定されている。本研究では、県の推進方針を踏まえて、読書指導を実践する際、200選からも本を選択し、200選の有効活用の一例として示したい。

### 2 研究の方法

(1) 実践時期

2学期9月から11月にかけて、国語の時間に読書指導の時間を特設して、資料の収集を行う。読書指導は、本来全教育課程を通じて行われるべきものであるが、今回は国語の時間に特設し、事例を収集する。また、読書へのアニメーションは、評定にかかわる評価活動を伴わないことを原則として成立するため、実践時に評価は行わない。ただし、ほかの単元の学習や日常生活で、読書に対する資質・能力の伸長や意欲の向上を長期的に見ることが可能であるので、本研究にかかわる読書指導の評価を行うことは可能と考える。

(2) 実践対象

A 中学校 2年生 40名 3年生 38名  
B 中学校 1年生 28名

B中学校は、文部科学省の読書指導に関する指定を受けて計画的な読書指導や読書環境の整備が進んだC小学校から生徒が進学してきている。

その他、県内各地の協力が得られる中学校で実践を行う。

すべての実施クラスを二つのグループ(1グループ20名以内)に分けて実践する。

(3) 実践の内容

読書指導の実践後、収集した資料の分析を行い、本好きな生徒が育つ要因について考察する。生徒が本とかかわる三つの段階を想定して、段階ごとに資料の分析・考察を行っていく。

#### ① 本と出会う段階

ア 生徒を対象にアンケート調査を実施し、主に読書環境などに関する基礎資料の収集

を行い、本好きな生徒が育つ読書環境の要因を考察する。

イ 読書指導における本の選択事例を中心に本好きな生徒が育つ要因を考察する。

### ② 自分で作品世界をとらえる段階

読書指導の実践の中で、生徒が個々の読みを変容させていく場面を中心に事例の収集・分析を行い、本好きな生徒が育つ要因を考察する。

### ③ 本を介して他者と交流する段階

読書指導の実践の中で、本を介した他者との交流が行われている場面を中心に事例の収集・分析を行い、本好きな生徒が育つ要因を考察する。

#### (4) データの収集方法について

- ビデオカメラにより指導者及び生徒について録画を行い、資料収集を行う。
- 実践の前後に観察される生徒のつぶやき、生活記録などの文章記述等、担任に観察を依頼し、資料収集を行う。
- アンケートや面接による資料収集を行う。

## IV 研究の概要

### 1 研究計画

実践時期 実践場所	実践内容	分析の手続
9月上旬 各中学校	○ 予備調査 読書興味、読書環境 などに関する予備調査	・アンケート の集計
9月中旬 から下旬 各中学校	○ 読書へのアニメシ ョンによる実践Ⅰの実 施 共通した本の選択に よる読書指導	①録画記録の 文書化・分析 ②実践Ⅱの内 容検討
10月中旬 から11月 下旬 各中学校	○ 読書へのアニメシ ョンによる実践Ⅱの実 施 各班の実態に合わせ た本の選択による読 書指導	①録画記録の 文書化・分析 ②実践ⅠとⅡ から導き出さ れた要因の分 析と考察

## 2 研究の経過

### (1) 予備調査の実施（詳細は資料編参照）

実践対象の生徒全員にアンケート形式による予備調査を実施した。調査内容は、読書興味、読書経験、読書環境等である。B中学校は、C小学校に在学していた時の読書環境や読書指導について調査するために、面接調査を実施した。

### (2) 実践Ⅰの実施（詳細は資料編参照）

実践Ⅰは、すべての班の生徒が共通して、「夏の庭－The Friends」（湯本香樹実著）を読み、読書へのアニメシジョンの読書による読書活動（作戦12 前かな 後ろかな）を行った。

### (3) 実践Ⅱの実施（詳細は資料編参照）

実践Ⅱは、各班の実態に合わせて、読む本を変えて実践した。これに伴い、それぞれ違う作戦を行った。

表1 各班別の実践Ⅱの内容

	班	作品名	作戦名
A 中 学 校	3 年	1 あのころはフ ードリヒがいた ※200選	作戦 54 だれが だれ に 何を？
		2 アドリア海の奇 跡	作戦 19 海賊文
	2 年	1 チョコレート工 場の秘密	作戦 9 だれのことを 言ってる？
		2 3年1班と同じ ※200選	内容
B 中 学 校	1	ミロと魔法の石	作戦 6 本と私
	2	あのころはフ ードリヒがいた	作戦 54 だれが だれ に 何を？

### (4) 補完調査の実施（A中学校のみ）

アンケートと面接による補完調査を実施。

## VI 研究結果とその分析・考察

### 1 本との出会いの段階で導き出される要因

- (1) 読書環境はどのような影響を与えるか

B中学校の生徒の予備調査を、出身小学校別に集計すると、C小学校出身の生徒が、本を好きと答える割合が高く、家庭生活の中に読書が位置づいていることが分かる。

表2 本を読むことは好きか

	好き	どちらでもない	嫌い	計
C小学校	10	1	0	11(人)
D小学校	7	9	1	17(人)

表3 一日の中で、家で本を読む時間があるか

	ある	ない
C小学校	11人	0人
D小学校	9人	8人

C小学校では、開放的な学校図書館の環境整備、学習場面での積極的な活用など様々な読書指導が継続して行われてきている。更に、PTA活動の中で保護者の図書委員が組織され、学校の読書活動への積極的な参加が行われている（C小学校の図書担当教諭からの面接調査）。予備調査では、「本を読むことで、親や友達との会話が多くなる」「本について話すのが好き」と答える生徒が他校と比較して多かった。

**導き出される要因**

- ① 継続された読書指導の実践
- ② 学校の読書活動に対する保護者の参加

(2) 生徒に合った本の選択はどうあるべきか

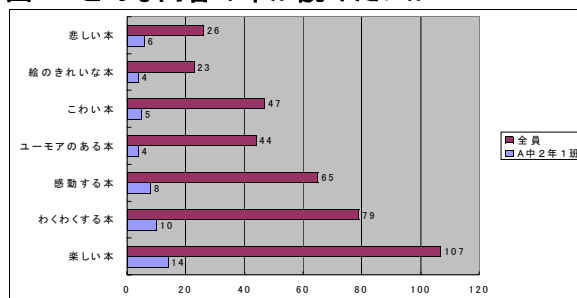
① 選択が実態に適していた実践事例

A中学校の2年1班は、実践Iで本が読み通せなかった生徒が20人中13人もおり、読むことへの苦手意識を持つ生徒が多い。そこで、実践IIの読書指導では、読むことへの抵抗感をなくし、興味を持って読み進められるような内容の本を選択することが必要と考えた。まず、本に設定されている対象年齢にこだわらずに、読みやすさを重視した。次に、興味を持って読めるよう、予備調査の結果(図1)を参考に、生徒の読書興味(楽しい本が読みたい)を重視した。

その結果、対象年齢が小学校中学年以上で楽しいエピソードを中心に内容が構成される

「チョコレート工場の秘密」を選択した。

図1 どんな内容の本が読みたいか



面接1 「チョコレート工場の秘密」を読んだ後のA男

T (指導者) A (A男)

- 1 T: チョコレート工場の秘密のどういうところが面白かった?
- 2 A: 工場見学のところとか、いろいろ面白い出来事があるから面白かった。それで全部読めた。
- 3 T: もう少し詳しく言うと工場見学のどういうところが面白かった?
- 4 A: いろいろな発明とか……。先が気になってすらすら読んで読めた。(中略)
- 5 A: 2回目は、四日くらいで読んだ。
- 6 T: すごい、早く読んだね。
- 7 A: 今回読んだことがもとで、今、少し読んでいる。チョコレート工場を読んでから、面白い本があるなって思っ



- ・ A男は、作品中の「面白い出来事」に興味をひかれ、それがもとで「すらすら読めた感じている(2・4)。
- ・ A男は、これまで感じたことのなかった読む面白さ、楽しさに気づき、実際に本を探そうとしている(7)。

A男は、実践Iでは、半分程度しか「夏の庭」を読めなかったが、実践IIの終了後は、図書館で本を借りて読むなど今までになかった読書への意欲の高まりを見せた(担任の観察による)。

A男以外でも、「とても読みやすかった」「内容が面白くどんどん読める」「わくわく感があって、早く続きを読みたい」などと生

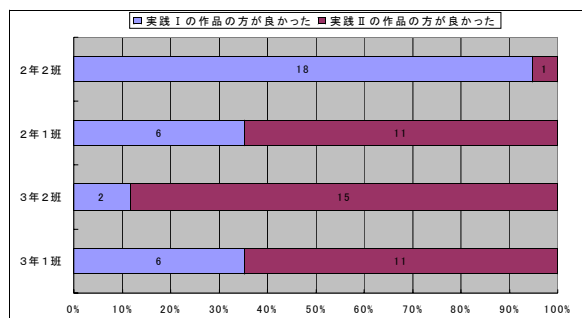
徒が答え、本を読み通せた生徒数が、13 人に増加した。

### 導き出される要因

- ③ 読書興味を生かした本の選択
- ④ 生徒の読書力に適した本の選択

② 選択の成否が分かれた実践事例

図2 実践 I と II ではどちらの本が良かったか



(A 中学校全員対象のアンケート結果)

図2を見ると、2年2班の生徒のみ実践 II よりも I の方が良かったと答えており、実践 II の選択が適していなかったことが分かる。同じ本を3年1班も読んだが、逆に良かったと答えた生徒数が多かった。そこで、なぜ本が読めなかったのかを調べるために、2年2班の生徒に面接調査を実施した。B男は、「悲しい話なので(つまらない)、ユダヤ人だから駄目とか、仕事も(やめさせられて)、みんな(理由が)そうなので、大体こうなのか程度でやめておきたかった」と話している。ほかの生徒も、「暗い話で面白くなかった」などと答え、否定的な感情を持った生徒が多かった。3年1班の生徒も面接調査を行ったが、「ユダヤ人が差別される場所に気持ちが動かされた」「昔の本当にあった話がつづられていて、様々なことを考えさせられた」「現実にもとづいてこういうことがあったということを書いている」ということを効果的に書いてある」など本の内容について自分の考えを持とうとする読み方をしている生徒が多かった。

### 導き出される要因

- ⑤ 生徒の読み方を把握した本の選択

## 2 自分で作品世界をとらえる段階

(1) 読書指導の中で、自分の読みが変わったと生徒が感じたのはどのようなときか  
実践 I の終了後、「前もって一人で読んだときと比べて、自分の読みが変わった感じがしたか」というアンケートを行った。

表4 自分の読みはどのように変わったか

(実践 I 終了後の A 中学校 3 年 1 班面接結果)

- ア こういう物語の楽しみ方もあるのだなと思った。話の順番がはっきりしたから長い間覚えていられそうな感じがした。ただ読むだけだとごちゃごちゃになってしまうので整理できてよかった。
- イ 順番を整理したら、話のあらすじがすっきり整理されてちゃんと通った感じがした。バラバラだった話の一つに整理された感じ。
- ウ 面白かった。読んだだけで順番を覚えていないと思った。
- エ 一度きちんと読んでいたけど思っていたより記憶があいまいだった。



- ・ 新しい読み方の体験をしたと感じている(ア)
- ・ 新しい読み方を行うことで、自分の読みがより明確になったと感じている(ア、イ)
- ・ 自分のこれまでの読み方に気付いている(ウ)
- ・ 自分の読み方の見直しを行っている(エ)

実践 I は、各自に渡されたカードを順番通りに並べ替えるという読書活動であった。この活動を行うことで、生徒は新しい読み方をしたと感じている。この経験により、自分の読みの明確化や自分の読み方の見直しが始まっている。

### 導き出される要因

- ⑥ 本の多様な読み方を体験すること

(2) 生徒は、読むことの意義をどのように感じたか

実践が終了した後、A 中学校の生徒全員を対象に「本を読むこととはどのようなことだと思うか?」というアンケート調査を実施した。

表5 本を読むこととはどんなこと？

(A中学校の生徒全員対象のアンケート結果)

- ア 最初はつまらなかったけれど、読んでいくうちに、本の場面が浮かんできて読むのが楽しくなってきた。本を読んだり、考えたりするのは大切なんだと思った。
- イ 読み始めは大変だけど読んでいくうちにのめり込んでいってしまうのが本のすごいところだと思う。またほかの本を読んでもみようと思った。
- ウ 本の世界に入って、いろいろな人と出会うことができるので本はその世界と私の心をつなぐ橋なんだなと思った。
- エ 本を読むと何となく気持ちが落ち着いたり和んだりするような気がする。
- オ 自分の考えとは違う考えが書いてあるので楽しい。
- カ 一人で読んだ後に、ほかの人の意見が聞けたりして本を読んだ後でもいろいろな楽しみ方があるのだなと思った。
- キ 新しい考え方を発見できるし、読むと様々な考えを持つことができる。

実際に読書を体験した後、生徒は読むことについて、(ア)イメージを思いうかべながら読むのが楽しい、(イ)本の世界に入り込んで読むのが楽しい、(ウ)作品の世界と対話することができる、(エ)読むことにより気分転換が図れる、(オ)自分の考えと比較して読むのが楽しい、(カ)読後の語り合いが楽しい、(キ)読むことで自分の考えを持つことができるなど、様々な意義を感じている。

導き出される要因

⑦ 実際の読書経験の中で、読むことの意義を生徒が実感できること

3 本を介して他者と交流する段階

(1) 他者と交流していく過程で生徒はどのように読みを深めるか

生徒同士の相互交流が行われている場面から生徒が読みを深める場面の資料を収集した。A男のカードに書いてあるセリフをだれが言ったのかを全員で考えている場面である。

表6 A男の課題について話し合っている場面

(A中学校3年I班の実践IIにおける逐語記録)

- Tは指導者、A～Gは、同じ班の生徒をあらわす。
- A : ユダヤ人はあなたたちの災いのもとだ。  
(カードに書いてあるセリフを読み上げる。)
  - T : これ、だれが言ってるか分かる？
  - B : 小さい変な人。
  - C : 小さい人じゃないよね、最初の方に出てくる人だよ。
  - D : うん、最初の方 (に出てくる人)。
  - C : その人 (小さい人) は最後に出てくる。
  - E : 少年何とか団というスカーフを巻いている人 (がその人だよ)。
  - G : 言わされるんでしょ、フリードリヒが。
  - T : ではもう一度聞くよ。これ、だれが言ったの？
  - 複数 : フリードリヒ
  - T : でフリードリヒが言わされようとしたのはこのセリフだけ？
  - D : わたしたち (の災いのもとだ)。
  - G : わたしたち  
※何人かがここで「あ、そうだ」と言い始める
  - T : わたしたちの災いのもとだっていうところを、フリードリヒが何て言ってるの？
  - C : あなたたちの (災いのもとだ)。
  - A : ああ、分かった。

3～7の意見交換は、正しい答えを求める方向で進んでいないが、生徒同士の活発な交流が見られる。3と4で、B子とC男は異なった意見を主張し合う。異なった意見を比較して、D子はC男の発言を5で支持する。C男は、自分の意見の根拠を6で付け足している。E子は、C男の発言を補い、文の内容をよりはっきりさせる(明確化)ための発言を行っている。3～7までの話合いの方向は、8のG子の発言によって修正される。G子は、課題となっているセリフが、「言っている」のではなく主人公フリードリヒが「言わされている」状況であることを述べて、3～7までの意見交換が誤った視点(ユダヤ人を批判する人が、このセリフを発言していると思いこんでいる)で行われていたことを

指摘する。この発言を受けて、指導者が9でG子の発言を整理したところ、生徒の思考が正しい方向へ向かい始める。11から15は、指導者によって全体の思考が整理されていく過程である。最後に、これまでの相互交流を聞いていたA男が、16で自らの課題の正答に気付く。指導者は、指名をしたり、内容に関する自分の解釈を前面に押し出したりすることを控えて、生徒の発言をできるだけ引き出そうと確認や整理を目的とする発言を行っている。

#### 導き出される要因

- ⑧ 生徒が、多様な読みの解釈を相互交流させる場をつくり出すこと
- ⑨ 指導者が、生徒対生徒で交流し合えるような場をつくり出せるよう、生徒への働きかけ方を配慮すること

#### (2) 本を介した相互交流を生徒が楽しいと感じるのはどのような状況の時か

次の面接2と面接3は、読書指導の実践Iの活動が行われる中で、話し合いがなぜ楽しかったかを話している場面である。

#### 面接2 話し合いの楽しさを語るM男

(A中学校2年生面接結果)

T (指導者) M (M男)

- 1 T: どうして話し合いが楽しいんだろう?
- 2 M: 何か、ゲームみたいだから、集中するって言うか、真剣にやったりするから。
- 3 T: ゲームだとどうして(楽しいの)?
- 4 M: 話す気になる。並べ替えたりするところが面白いから。ゲームにすると面白い。



- ・ M男は、ゲームであったから、自分が集中して真剣に話し合いに参加できたと考えている(2)。
- ・ M男は、話す気持ちになったのは、ゲームを取り入れた活動が面白かったからだと感じている(4)。

#### 導き出される要因

- ⑩ 生徒が話し合いに目的意識を持てるような読書活動を工夫すること

#### 面接3 話し合いの楽しさを語るK男

- 1 T: なぜ普通の話し合いと比べて楽しかったの?
- 2 K: 一人の人が話している時に、みんなが聞いてくれたのが良かったんじゃないですか?  
(授業の時) 教室で話し合いをする時には、緊張感がなくて、違う話とかしている人がいるんですよ。だから、余り全員でまとめたという感じではなくて。  
みんな(自分が)話すとき、聞いてくれたし、みんなで話し合っただけだから、達成感みたいなものが感じられたと思います。



- ・ K男は、みんなが聞いてくれるので、話し合いが楽しかったと感じている(2)。
- ・ K男は、互いの発言を聞き合う話し合いの場ができることが達成感を感じることに繋がると考えている(2)。

#### 導き出される要因

- ⑪ コミュニケーションのルールが守られた話し合いの場をつくり出すこと

#### 4 導き出された要因の分析と考察

##### (1) 「本と出会う段階」で導き出された要因の分析と考察

##### ① 本好きな生徒が育つ読書環境とは

B中学校の予備調査の結果から、C小学校出身の生徒全員に読書習慣が定着していることが分かる。単発な読書指導に終わらずに、小学校の時に継続された読書指導が行われてきたことが生徒の読書習慣を定着させるために大きな役割を果たしたと考える(要因1)。また、保護者が学校の読書活動に共に楽しむ形で参加したことも、読書習慣の定着に大きな役割を果たしたと考える(要因2)。親が「勉強になるから本を読みなさい。」ということよりも、親自身が本を楽しむ姿勢を見せること、本について家庭で楽しく語り合うことが、家庭での読書環境を充実させて、本を読むことを楽しむ感情を育てたと考える。

##### ② 本との出会いをどのように作っていくか

本の選択が適していた事例では、読書興味

を生かした選択を行ったことが、本を読むことは面白いという気持ちを生徒に起こさせ、効果を上げた（要因3）。この選択は、特に読むことを苦手とする生徒たちに有効であったと考える。なぜなら、読むことが苦手な生徒は、読書経験が浅いために何を讀んだら面白いのかが分からず、面白かったと思える本と巡り会えずにいることが多いからである。この段階の生徒は、本を自由に選択することを任されても、困惑してしまう。それよりも、指導者が読む本を指定して、読んでみたら面白くて思わず読み進んでしまったと感じられるような状況をつくり出していくことが、まず必要な段階であると考え。読書離れの生徒が多い状況では、このように指導者の側から読書体験の場を設定するような積極的な指導も取り入れていくことが有効と考える。

また、本を読まない生徒は、読むことを大変であると感じていることが多い。したがって、読みやすい本という観点から本を選択することも重要と考える（要因4）。面接1で、A男は、本が読みやすく内容も面白かったので、すらすら読めたと感じている。一冊の本を最後まで読み通したという体験は、A男に読むことに対する大きな自信を持たせ、実践終了後の自発的な読書へと向かわせた。読むことを大変だと感じている生徒への読書指導は、読むことに対する抵抗感を取り除くことを特に重視し、本の対象年齢など既成概念にとらわれない柔軟な読書指導を計画していくことが必要と考える。

本の選択の成否が分かれた事例では、本の内容に対して拒否感を持った生徒と肯定的に受け入れた生徒とに二極化する傾向がアンケート結果で現れた。否定的な生徒は、本の内容を「悲しいから嫌だ。」と自分の一方的な視点で読もうとしているのに対して、肯定的な生徒は、本から受け取る新しい考え方も踏まえて多様な視点から内容を読みとろうとしていることが分かる。二つの事例の比較を通して、どのような本の読み方を生徒がしているかで本の内容の受け止め方が違ったものになり、読み方を把握した本の選択が重要であることが分かる（要因5）。

## (2) 「自分で作品世界をとらえる段階」で導き出された要因の分析と考察

### ① 読みの変容には何が必要か

P5の表4には、新しい読み方の体験により自分の読みがどのように変わったと感じたかが述べられている。この中で、自分の読み方への気付きや見直しなどが起きているが、これは、新しい読み方を体験したことが、自分の読み方の自覚につながり、よりよい読み方をしようと読み方への吟味が生徒の内面で始まったためと考えられる。このように、新しい読み方を読書活動の中に工夫して取り入れていくことで、生徒は自分の読みをより深められるようになる。したがって、できるだけ多様な読み方を体験していくことで、生徒はより深く本を見つめる読み方を身につけていけるようになる（要因6）。

### ② 読むことの意義を感じることで何が育つか

P6の表5には、読書指導の実践が終了した後、それぞれの生徒が、自分の体験に沿った様々な意義を感じたことが示されている。重要なのは、生徒が自らの読書体験の中で自分なりの意義を実感することである。（要因7）。なぜなら、自らの実体験を通して、読むことの意義を実感できたことが、読むことは楽しいという生徒の読書感情を育てることに大きな役割を果たすからである。「何冊読もう」とか、数値目標が読書指導の中で設定されることがあるが、これは、あくまでも外発的な動機付けである。読書感情を育てるためには、生徒が内面で読むことの意義を感じることができるような読書を体験することが重要である。

## (3) 「本を介して他者と交流する段階」で導き出された要因の分析と考察

### ① 他者と交流することで生徒はどのように読みを深めるか

実践Ⅱの生徒の相互交流の場面では、違った読みとりをした生徒が互いに自分の意見を表明し合ったことがきっかけとなり、更に新しい相互交流へと発展した。この交流の中で、考えの根拠を挙げたり、読みを明確にさせたりの発言が生まれ、全体の内容理解を深める話合いが生まれている。これは多様な解釈



を交換し合える場を形成することが生徒の読みを深めるために有効であることを示している（要因8）。また、このような生徒同士の相互交流を引き出すために、指導者は、意見を確認したり整理したりする調整者としての役割を果たしていた。指導者が生徒を指名したり、自らの解釈を表明して全体の読みを誘導しないように心掛けたりしたことで、生徒同士が活発に相互交流を行う場が作り出されている（要因9）。

## ② 本を介した相互交流を楽しみと感じるのほど のようなときか

面接2でM男が話合いを楽しみと感じたのは、目的意識を持つことができたからである（要因10）。目的意識が生まれることで、生徒は主体的に話合い活動に参加するようになる。主体的な参加によって、活発な相互交流が生まれ、意見交換する楽しさが実感できる。このように、自分の考えを自然に表現したくなるような場の工夫を行うことが、本を介した他者との交流を楽しみと感じるさせるための手だてとして有効である。本事例の場合は、活動にゲーム的要素を取り入れたことが効果を上げたと考えられる。

面接3で、K男が話合いを楽しみと話しているのは、ほかの人が聞いてくれると実感できたからである。相手の話をよく聞くというのはコミュニケーションを成立させるためのルールとして一番大切なことである。なぜなら、相手が聞いてくれていると感じることで、自分の考えが大切にされて確かに伝わったという実感を得ることができ、安心して自由に発言することができるようになるからである。コミュニケーションのルールを守ることが、生徒相互の話合いの場をつくり出すためには重要となってくる（要因11）。

## Ⅶ 中学校における読書指導への提言

### (1) 読書習慣を定着させるためには

大半の生徒が読書離れを起こしている現状においては、読書習慣の定着がまず大きな課題である。この課題を達成するためには、生徒の読書感情を重視した読書指導を行っていくことが必要と考える。なぜなら、読むことを習慣化さ

せるには、実際に読むことを行動化できるかどうか重要であり、生徒が読むことを楽しいと感じる肯定的な読書感情が育っていることが行動化を行うために必要不可欠と考えるからである。では、読書感情を育てるためには何が必要か。それは、読むことの意義を生徒自身が自分の内面で感じる読書を体験することと考える。しかし、読書習慣が定着していない生徒は、なかなか読みたい本に巡り会えず、自由な読書に任せていただけでは自分なりの意義を発見できずにいることが多いのが現実である。

そこで、読書習慣の定着を図るために次のような手だてをとることを提唱したい。まず、指導者が意図的に生徒に読む本を指定して読書を行う機会を積極的に作り出していくことである。集団読書の形態を取り、みんなで読みを共有する機会をつくり出すことが必要と考える。次に、どのように読んだら楽しいのか、読むことの面白さを発見できるような読書活動を計画することである。そのためには、多様な読み方が楽しく体験できるような読書活動を計画していくことが重要と考える。

### (2) 本に書かれている内容をもとに自分の考えを 深められる読者を育てる

これまで中学生の読書指導については、どのような本を読むかという視点で考えられたことはあっても、どのような読み方ができる読者になってほしいかという視点で検討されたことは余りなかった。しかし、中学校の時期で体験してほしい読み方を基に目指すべき読者像を想定することは、読書指導を体系的に進めていく上で是非必要なことである。読書指導は、長期的な見通しを持ち、体系的な指導を継続していくことで十分な効果を上げることが可能になるのである。そのためには長期的な見通しを持つために、小学校、高等学校も見通した上で、各段階で目指す読者像の想定を行うことが重要と考える。

本研究は事例分析的な手法で、本好きな生徒が育つための要因を、生徒の読書過程の観察を中心に探ろうとしてきた。この中で読者像を想定するための示唆となる次のような観察結果が得られている。それは、中学校の後半の時期になると、より多様な視点で本の内容について考

えを持つようとする生徒が出てくるということである。これは、学童期の娯楽を中心とした読み方に加えて、本の内容をもとに自分の考えを深めようとする読み方が可能になることを示している。また、本の楽しみ方も、読むことから得られる娯楽としての楽しみ方だけでなく、読むことを通して自分の考えを深められるという知的な満足感を充足する楽しみ方へと移行し始めている時期であることを示しているとも考えられる。しかし、これは十分な読書経験などに裏打ちされたもので、まず、本を読む機会がなければ、そして読んで考えようとする機会がなければ、なかなか読み方を向上させることは難しいと考える。

そこで、中学生の読書指導における目指すべき読者像を、「本に書かれている内容をもとに自分の考えを深められる読者」とし、このような読者を育てるための読書指導を推進する重要性を提案したい。そして、このような読者を育てるための手だてとして、本を介して他者と相互交流を行う活動を効果的に取り入れた読書指導を実施することを提唱したい。なぜなら、自分の考えを変容させるためには、読書活動の中に、自分の考えとは異質な他者の視点にふれ自分の内面で形成した読みと比較を行いながら更に考えを深めていけるような過程を取り入れることが有効であることが事例の分析から確認されているからである。

また、指導者が果たすべき役割は、生徒同士が自発的に対話がしたくなるような環境をつくり出すことであり、このような場が作り出されれば、生徒は積極的に意見を交流させ新しい読みをつくり出していけると考える。

## Ⅷ 研究のまとめと今後の課題

- 読書習慣の定着は、現在の読書指導における大きな課題の一つである。この課題を解決するためには、読書感情の育成を重視することが大変重要と考える。キーワードは、「みんなで楽しく読む」ということである。集団で楽しみながら本を読むことは、本好きな生徒が育つための有効な手だてと考える。
- 読書は、心の豊かさを育てることはもちろん、生徒の思考力を育成したり、コミュニケ

ーション能力を育成したりするための手段として、これまで以上に積極的に学校教育の中に取り入れられるべきものと考え。そのためには、小学校や高等学校との関連も踏まえた長期的な見通しを持った読書計画を作成することが必要と考える。長期的な計画を作成することにより、これまで単発で行われがちだった多様な読書指導法を体系立てて結びつけていくことも可能になり、それぞれの指導法の長所をうまく生かせるようになると考える。

- 本研究では、実践資料を収集するために読書へのアニメーションを活用した読書指導を行った。この指導法の実践を通して、国語科における読解指導を行っていくための大きな示唆も得られた。生徒同士の相互交流を取り入れることで生徒自身の読みがうまく生かされること、遊びの要素を取り入れることで生徒の考えを焦点化させ主体的な活動を生み出すこと、多様な読み方を体験させる手だてを持ち、常に新しい読み方を体験させることで豊かな本の読み方を引き出そうとしていることなどがそれである。また、生徒相互の話し合いの場を重視するため、コミュニケーション能力の育成の場としても適しており、「話すこと・聞くこと」の学習を行う際の手だてとしても有効であると考えられる。読書へのアニメーションは、生徒の主体性の尊重するために制約を設けることも多いが、その考え方を国語科の学習に生かすという点において大変意義がある読書活動と考える。

### 《参考文献》

- ・M・M・サルト著 宇野和美訳 『読書へのアニメーション 75 の作戦』 柏書房 (2001)
- ・有元秀文著 『読書へのアニメーション入門』 学習研究社 (2002)
- ・秋田喜代美著 「読書の発達心理学」 国土社 (1998)
- ・「国際読書教育シンポジウム」(2003.5.13 - 14) 報告書「生きる力」をはぐくむための読書教育のありかた、国立教育研究所、2000